



level.1 — なみやき、詠唱、祈り、目覚めよ

灰と幻想のグリムガル

十文字青

イラスト= 白井鋭利

Presented by Ao jyumoni
Illustration by Eiri shirai

OVERLAP

灰と幻想のグリムガル level.1

なみやき、詠唱、祈り、目覚めよ

十文字青

OVERLAP

【Class一覧】

戦士(ウォリアー)

魔法使い(メイジ)

盗賊(シーフ)

神官(プリースト)

狩人(ハンター)

聖騎士(パラディン)

暗黒騎士(ドレッドナイト)

※この他にも「武士」など、特殊な役職も存在する。

【スキル(技能・技)・魔法の習得】

訓練によって習うことのできる技能、技(だいたいスキルと総称される)、魔法は、覚えてたの状態ではあくまで基礎がある、実行可能というだけで、充分な威力、効果を発揮することはまずできない。練習、とりわけ実戦で使用する(実戦での使用は、練習の十倍の効果があるとされる)ことによって、いわば熟練度がたまってゆき、徐々に本来の威力、効果を発揮できるようになってゆく。完全に習得するまでには、それなりの時間、労力がかかる。

【クラン】

主に義勇兵たちが同じ目標などを持って結成するチーム、グループ。仲間、くらの意味。単独パーティーだと攻略しづらいような大規模な砦や迷宮などを攻める際、複数のパーティーが連携しなければならなくなる。そのあたりの事情からクランを結成する者が現れはじめたと思われる。義勇兵団には明確な規定はいが、クラン結成時は事務所に申告することが推奨されている。

【ギルド】

この世界にはさまざまな組合(ギルド)が存在する。多くは特定職業者団体であり、全組合協定によって、一人の個人は一つの組合にしか所属することができない。組合には、ほとんどの場合、組合員が必ず守らなければならない掟がある。これは文章化されておらず、組合から口頭で組合員に伝えられ、破った者は組合から追放される。追放された者は二度とその組合に入会することは許されない。また、ただ追放されるだけですむかどうかは、その組合による。組合によっては、追っ手をかけられ、命を狙われる場合もある。

【モンスター】

ゴブリン

醜悪なこびと。身長は大きくても140cmほど。だいたい120cmくらいの個体が多い。黄緑色の肌をしていて、耳が尖っている。個体差はあるが、なかなか賢く、不利な戦は挑まない。集団行動を好む。血族支配による王国らしきものを築いている。多産で、妊娠期間が三ヶ月ほどと短く、頑健で、成長速度も速いので、個体数は非常に多い。ゴブリン袋と呼ばれる小さなバッグを肩に提げていて、その中に大事な物をしまっておく習性がある。上位のゴブリンは、このゴブリン袋も飾り立てていて、それ自体なかなか高く売れたりもする。彼らは彼らなりになかなかおしゃれさんなので、けっこう高値がつく物を身につけている。狙い目。

ホブゴブリン

ゴブリンの亜種で、ゴブリンに比べると個体数は少ない。ゴブリンに似ているが、体格は人間と同程度。ゴブリンより凶暴だが、知性は劣り、ゴブリンに飼い慣らされ、奴隷戦士化していることもある。だいたいゴブリンより背が高いので、いじめられる。一部の知性的なホブゴブリンは部族社会を形成し、ゴブリンを敵視している。たまに従順なホブゴブリンがいて、ゴブリンに飼われ、ボディガード的に武装させられて、猛威をふるうことがある。偉いゴブリンは、たいていそうしたホブゴブリンの護衛に身を守らせている。

穴鼠

猫ほど大きい大型の鼠で、すばしっこく、体毛が非常に硬い。ハリネズミに似る。身体を丸めて転がって逃走する習性がある。亜種多数。雑食だが、肉を好み、集団で大型の獣(人間を含む)を襲う凶暴な穴鼠もいる。肉はあまりうまくない。毛皮も利用価値がない。害獣である。

不死族(アンデッド)

不死族の一派。不死の王によって生みだされた新しい種族である。スケルトン、ゾンビ、ゴーストは、正確にはアンデッドではない(人間族にはアンデッドと見なされることもあるが)。アンデッドは、一度死んだが、死んでいない、腐ることもない生物で、強力な再生能力を持ち、脳を破壊されたり、焼き払われないと滅びない。不死の王の黒い血を与えられた死体がアンデッドになったと言われているが、不死の王がいない今では、不死族の司祭や司教が「不死儀」を行って、死体をアンデッド化させる。アンデッド化した者は、生前の記憶の大部分を失い、不死の王に忠誠を誓うようになる。不死の王がいない今でも、それは同じである。

ゾンビ

「不死の王の呪い」によって、グリムガルドで死んだ者は、適切に処置されないと、「不死の王の従者」と化すようになった。ゾンビはいわゆる「肉つき」の従者で、肉が完全に腐り落ちると、スケルトンとなる。頭を切断する、脳を破壊すると動かなくなるが、放っておくとスケルトンパーツやゴーストになってしまう。

目覚めよ。

イラスト／白井鋭利

誰かの声が聞こえたような気がして、目を開けた。

暗い。夜なのか。でも真っ暗じゃない。灯りがある。火。頭上だ。火がついている。蠟燭らしい。小さな蠟燭が壁に据えつけられている。一つじゃない。蠟燭は間隔をあけていくつも、ずっと向こうまで並んでいる。どこだ、ここ。

なんだか息苦しい。壁をさわってみると、硬くてごつごつしている。こんなもの、壁でも何でもない。ただの岩じゃないか。どうりで預けていた背中が痛いわけだ。おしりも痛いし。もしかして、洞窟とか、そんな感じ？ 洞窟？ なんて洞窟なんかには……？

蠟燭はけっこう上のほうにある。立ちあがって手をのばせば届くかもしれない。そのくらいの高さだ。おかげで足下も、手元さえ、ほとんど見えない。

だけど気配がする。耳を澄ますと、息づかいのような音が微かに聞こえる。人間、なのか。違ったらどうしよう。やばいかも。でも、なんとなく人間っぽい。

「もしかして、誰がいる……？」

おそろおそろ言ってみたら、すぐに「あ、うん」と返事があった。男の声だ。「……います」と答えたのは女だろう。別の男の声が「ああ」と短く応じた。「……やっぱり」と誰かが言った。「何人いるんだ？」「数えてみる？」「……ていうか、どこなの、ここ」「さあ……」「わかるやつ、いねえのかよ」「どうなってんの？」「何だよ、これ」

まったくだ。何なんだよ、これ。なんでこんな場所に。なんで？ いつから？

かきむしるように胸を押さえる。わからない。自分はいつかからここにいるのか。どうしてここに。考えると、頭の中で何かが引っかかりそうになる。だけどその何かがふっと消えてしまう。わからない。まったく。さっぱりわからない。

「じっとしてたってしょうがない」と誰かが言った。男だ。ハスキーな、低い声だった。

小石を踏みしめるような音が聞こえた。男は立ちあがったみたいだ。

「どっか、行くの……？」と女の声が尋ねた。

「壁伝いに」と男が答えた。「灯りの方向に進んでみる」

男の声音はやけに落ちついている。怖くないのか。なぜ動揺してないのだろう。男は二つ先の蠟燭の下にいる。ずいぶん上背があるらしい。蠟燭の光に照らされて、頭がちよっとだけ見える。髪が黒くない。銀色……？

「あたしも行く」と女が言った。「……俺も行こっかな」と誰かが。男の声だ。「ま、ま、待って、じゃあオレも！」と他の男が言った。

「逆の方向にも」とまた別の誰かが言った。少し高い声だが、これもたぶん男だ。「進めそうだよ。蠟燭はないけど」

銀髪の男が「そっちに行きたいんだったら、好きにしろ」と言い捨てて歩きだした。皆、銀髪の男についてゆくみたいだ。だったら、自分も行かないと。慌てて立ちあがる。ひとりぼっちになりたくない。

岩壁に手をついて、こわごわと足を進める。

地面は滑らかじゃない。いくらかてこぼこしているが、わりと歩きやすい。前にも、後ろにも誰かがいる。誰かはわからないけど。声の感じからすると、そんなに年のいった人はいないようだ。少なくとも、知りあいはいない——と思う。知りあい？知りあい。友だち。何だろう。妙だ。一人も思い浮かばない。いや、正確には、浮かびかけた顔をたぐりよせようとすると、すっと消えてしまう。わからない。

友だちだけじゃない、家族さえも。

まるで覚えていないというよりも、覚えていたはずなのに、忘れてしまう。

「……考えないほうがいい、のかな」

「何か……」と後ろから声がした。きつと若い女の子だ。「……何か、言いました？」

「いや、べつに、なんでも——」

ない……のか？ 本当に？ なんでもない？ どこが？

頭を振る。いつの間にか立ち止まってしまっていた。歩こう。歩かないと。考えないほうがいい。思いだそうとすればするほど、どんどんわからなくなる。そんな気がする。

蠟燭の列はつづく。いつ果てるとも知れない。

もうどれくらい歩いただろう。かなり歩いたのか。そうでもないのか。どちらともつかない。距離や時間の感覚が麻痺している。



「何かある」と前のほうで誰かが言った。「明るい。……ランプ?。」
 銀髪の男が「鉄格子だ」と言うと、別の男が「で、出口じゃねえの……!?!」と声をうわ
 ずらせた。

途端に足どりが軽くなった。暗くてもわかる。全員、先を急いでいる。

見えてきた。蠟燭よりもずっと明るい。たしかにランプだ。壁に掛けてあるのか。ラン
 プの灯りが鉄格子らしきものを照らしている。

銀髪の男が鉄格子に手をかけた。男は髪が銀色のうえに、ギヤングみたいな身なりをし
 ている。ギヤングに激しく揺さぶられると、鉄格子が動いた。「開くぞ」

ギヤングは鉄格子を手前に引いた。軋む音を立てて、鉄格子の扉が開く。

「おお……!」と何人かが一斉に叫んだ。ギヤングの後ろで、派手な格好をした女が「出
 られるの!?!」と言った。

ギヤングは扉の向こうへと進んだ。「――階段だ。上に行ける」

扉の先は狭苦しくて臭い通路になっていた。その先に石の階段があった。灯りはない。
 でも、上から光が射しこんでくる。

一列になって、階段を一段ずつ上っていった。

階段の上にはまた鉄格子が嵌められていた。今度は開かないようだ。ギヤングが鉄格子
 を掌で何度も叩いた。「誰かいねえのか! ここを開ける!」

獣の吼え声みたいな、ものすごい怒鳴り声だった。派手女も「ねえ、いないの、誰か、
 開けて!」と声を張りあげた。二人の後ろから、髪がくりくりしている男も「おーい、開
 けてくれ! おーい!」と大きな声を出した。それから間もなくだった。

ギヤングが鉄格子から手を離して少し下がった。誰かきたらしい。派手女も、くりくり
 髪も口をつぐんだ。鍵を開けるような音がした。鉄格子の扉が開いて、「出ろ」と誰かが
 言った。どうやら扉を解錠して開けた男の声らしい。

階段を上がると、そこは石造りの部屋だった。窓はないものの、ランプのおかげで明る
 い。上ってきた階段の他に、上階への階段もあった。

全体的に古くさくて、現代っぽくない。扉を開けた男の出で立ちも変だ。だって、男が
 身につけているものは服じゃない。金属製の、あれは――鎧? それから、兜と呼びた
 くなるような形のヘルメットを被っている。腰に提げている物体は、ただの棒じゃなさそ
 うだ。もしかして、剣……とか? 鎧兜に剣なんて、何時代? 時代の問題でもないか。

鎧の男が、壁に据えつけられている黒っぽい器具を引っぱった。
 壁が、床が、わずかに振動して、重い音が響く。壁が動いた。

開く。壁の一部が、ゆっくりと。

沈みこんで、穴があいた。縦長の、四角い穴が。

鎧の男はまた「出ろ」とだけ言って、穴の外に向かって顎をしゃくってみせた。

ギャングがまず外に出て、派手女がつづいた。引きずられるように皆、ぞろぞろと穴の外に足を踏みだした。——外。今度は本当に、外だ。

夜明け前か、黄昏^{なそがれ}どきか、そのどちらかだろう。薄明るい空がどこまでも広がっている。

小高い丘の上だ。

振り返ると、高い塔がそそり立っていた。自分たちはさっきまでこの塔の中にいたのだ。あるいは、塔の下にいた、と言うべきだろうか。

人数をかぞえてみると、ギャング、くりくり髪、それから自分をふくめて男が八人、女は派手女以下四人。ぜんぶで十二人いる。

暗いのはつきりとは見えない。それでも体格やだいたいの服装、髪型、大まかな顔だちくらいはわかる。やっぱり、見覚えのある者は一人もない。

「街かな、あれは」と誰かが言った。さらさら髪の手すらつとした男だ。丘の向こうを指さしている。

そっちのほうに目をやると、建物がひしめいていた。

街。たしかにそう見える。きつと街だ。ただ、その街は高い塀——いや、塀なんてちゃんなものじゃない、高くて頑丈そうな壁に囲まれている。

「街というか」と黒縁の眼鏡をかけている細身の男が言った。「まるで城みたいだ」

「城……」と呟^{つぶや}いた自分の声が、なぜだか他人の声みたいに聞こえた。

「……あの」と、すぐ後ろにいる小柄な女の子がおずおずと尋ねてきた。「……ここって、どこなんでしょうか」

「や、おれに訊^きかれても」

「……そう、なんですね。あの、だ、誰か……知りませんか？　ここが、どこか……」
誰も、何も言わない。わざと女の子を困らせようとしているか、何か理由があつて隠しているのだけければ、全員、心当たりがないということだ。

くりくり髪が、くりくりした髪を引っかきまわしながら「マジかよ……」と言った。

「そうだ！」と、ボーダーのカットソーを着ているいかにもチャラそうな男が手を打ちあわせた。「あいつに訊けばよくね!？」　ほら、あの鎧とか着ちゃってる系のあいつにさ！

皆の視線が塔の出入口に集中した。その直後だった。出入口が狭まってゆく。

下から壁がせりあがってきて、ふさがりつつある。

「ちょちょ、待っ——」チャラ男が慌てふためいて駆けだした。間に合わなかった。出入口はすぐになくなって、外壁と見分けがつかなくなった。チャラ男が「おいおいそれはないでしょ、ちょっとちょっとやめてくれよおい……」とか言いながらあちこちさわったり叩いたりしているが、何も起こらない。やがてチャラ男はへたりこんでしまった。

ひよむーはツインテールを揺らして歩きだした。見れば、塔から丘の下へと向かう道がある。踏みかためられた黒い土が剥ぎだしになっている道の両側は草むらだ。丘を覆う草むらのあちこちに大きな白い石がちりばめられている。ものすごい数だ。多すぎるし、整然と並んでいるように見えなくもない。まるで並べられているかのように。

「なあ、あれって……」くりくり髪が白い石を指さした。「ひよっとして、墓……」ぞっとした。

言われてみれば、石には何か文字のようなものが刻まれている。石の前に花が供えられていたりもする。墓地。もしかして、この丘は墓地なのか。

先頭を行くひよむーが振り向かずに「ふっふふふー」と笑った。「どうですかねー。まあ、今のところは気にしない、気にしなあい。みなさんにはまだ早いですよん。まだ早いとよいですよねー。うっふふふ……」

丸刈り男がまた舌打ちをして土を蹴った。だいぶ頭にきているみたいだが、一応、ひよむーについてゆくつもりようだ。ギャングはとくに歩きはじめているし、黒縁眼鏡と派手女、ちっちゃい子もあとに従っている。チャラ男が「おあつ、お、俺も俺も、俺ちゃんも……！」と叫びながらギャングたちを追いかけようとして、すっ転んだ。

どうやら行くしかないみたいだ。でも、ひよむーは自分たちをどこへ連れてゆく気なのだろう。ここはどこなのか。

ため息をついて空を仰いだ。「——あ……」と声ももれた。何だ、あれ。

けっこう低い位置にある。太陽じゃないはずだ。星にしてはあまりにも大きすぎるし、そもそも欠けている。半月と三日月の中間くらいの形だ。ということは、もしかして月なのか。だけど月にしてはおかしい。

「……赤い」

まばたきをして見なおした。何度見てもルビーみたいに赤い。

後ろで気弱そうな女の子が「はっ」と息をのんだ。振り返ると、彼女も赤い月を見つめていた。

「ああ」お下げの女の子も気づいたようだ。目をばちばちさせて、ほわっと笑った。「お月さん、赤いやん。めっちゃきれい」

さらさら髪の方が暁の空に浮かぶ赤い月を見上げて、呆然とした表情で立ちつくしている。くりくり髪が「おわあ……」と目を見開き、やたらと身体が大きくて見るからにおっとりしていきそうな男が低く唸った。

ここがどこかはわからない。自分はどこから、どうやってここに来たのか。それもわからない。思いだせない。でもただ一つ、これだけは確かだ。

ここじゃないどこかの月は赤くなかった。

月が赤いなんて、おかしい。

1. わからないことだらけで

石造の建物が並んでいる地区もあれば、木造建築ばかりの地区もある。石畳の道は曲がりくねっていて、見通しがよくない。太い道の脇には細い水路が設けられている。流れる水はほとんど濁っていない。たまに悪臭、おそらく汚物の臭いを感じることもあるが、歩いているうちに気にならなくなる。

ひよむーは十二人の男女を丘の向こうの街の中へと導いた。彼女が言うには、ここはオルタナという名の街らしい。街だけに人が住んでいて、まだ早朝のはずだが、決して少ない数の住人とおぼしき男女とすれ違った。住人たちは、誰も彼も物珍しそうに十二人をじろじろ見た。でもそれはこっちも同じだった。だって皆、格好が変なのだ。どう変かというと、総じて十二人の服装よりも簡素で、飾り気がなくて、みすばらしい。

「ここつてさ」とチャラ男が言った。「あれかな？ 外国なんかね……。」

「あー……」くりくり髪が何か答えようとして、首をひねった。「……外国？ 国？ そのうえば、オレって何人だっけ？ あれ？ おっかしいな、思いだせねーんだけど……てか、住所とかもわかかんねーし。あれ？」

「気づいてなかったのか」とギヤングが低い声で言った。「俺はもう、せいぜい名前くらいしか覚えてない」

もう、覚えてない、という言い方が引つかかった。それだとたぶん、ただ覚えていないというのとは意味合いが違うはずだ。ギヤングも、ある記憶をたぐりよせようとすると消えてしまう、あの感覚に襲われたのかもしれない。

「名前……」くりくり髪は自分の胸をとんと叩いた。「オレの名前は……ランタ。あとは……うーん。わかかんねー。うっわ。マジかよ。記憶消失じゃん……」

「それを言うなら」思わずツツコむ体勢に入ってしまったって、ちょっと後悔した。だけどここでやめるわけにもいかない。「記憶喪失だろ……」

「おまえさ……」くりくり髪はため息をついた。「ツツコむならもつとこう、あるだろ？ 適切な勢いっつーか。中途半端な感じでこられると、ボケたこっちとしても微妙じゃん？ 場も白けるしさ。まあいいけど。今回は大目に見るけど。んで、おまえは？」

「大目に見られるんだ……」そもそもあれはボケだったのか。ひどいボケだ。どうも釈然としないが——名前。自分の名前は。「……おれは、ハルヒロ。かな？」

くりくり髪「ランタはわざとらしくずっこけた。「——かな？ っておまえ、自分の名前もわかかんねーのかよ！ いや、名前くらいしかわからんぞって話をしてるわけだけど」

こいつ、かなりうざいな……と思いつながら、ハルヒロはひよむーの後ろを歩いているギヤングに目をやった。あいつは何て名前なんだろう。なんとなく訊いておきたい。でもおっかなくて訊けない。その代わりというわけじゃないが、すぐそばにいるさらさら髪

すらっとした男に「きみは……?」と尋ねてみた。
 「ああ」さらさら髪は微笑んでくれた。やたらと爽やかな男だ。「俺はマナト。ハルヒロ、でいいのかな。呼び捨てにしても?」

「あ、うん、いいよ。じゃ、おれも、マナトって呼んじやってもいい?」
 「かまわないよ、もちろん」

マナトに笑いかけられると、ついこっちも笑顔になってしまう。見るからにいいやつそうだし、信用できそうだ。

ランタはうざい。ギャングは怖くて、丸刈りも強面だ。派手女は住む世界が違う印象だし、いかにも頭がよさそうな黒縁眼鏡もなんだか声をかけづらい。お下げの子、気弱そうな子、ちっちゃい子、この女子三人はどうだろう。気弱そうな子とは少しだけ話したし、今も近くにいる。とりあえず名前だけは教えてもらおうか。だけどいざ、あらたまって口をきくとなると、若干緊張する。ハルヒロは一つ咳払いをした。「あ、あの」

「……は、はいっ……?」

「い、いやべつに、えーとたいしたあの、あれじゃないんだけど……」

「俺ちゃん！ キツカワどうえーすっ！」とチャラ男がいきなり珍妙なポーズをとって大声を出した。「イエイエー！ 男子はあとまわしで、まずは女性陣！ ここらで一発、自己紹介決めちゃわなーい!」

お下げの子が首を横に振った。「決めちゃわない」

「うっそーん！」チャラ男キツカワは一撃であえなく撃沈された。ちよっぴりざまあみると思わないでもなかった。でも、キツカワのおかげで勢いがついた。

「えっと」ハルヒロはできるだけさらっと訊いてしまっことにした。「名前は？ 知っていると、呼びやすいと思うし。まあ、知らないよりは」

「あっ……」気弱そうな子はうつむいて、前髪をぐいぐい引っぱった。顔を隠そうとしているのか。目も鼻も口も控えめではあるが、けっこうかわいらしい顔だちをしているし、隠す必要なんてなさそうなのに。「……あたし、は……シホルです。それが名前、なんですけど。一応。すみません……」

「や、謝らなくても」

「ごめんなさい、癖で。ごめんなさい、気をつけます……」

シホルは生まれたての子鹿みたいに震えている。大丈夫なのか、この子。見ていて心配になる。庇護欲をそえられるというか。

「きみ、おっきいね」とマナトがおっとりしていきそうな巨漢に訊いている。「身長、どれくらいあるの?」

「え」巨漢はぼんやりとまばたきをした。「身長、は、百六十……」

「百六十?!」とランタが口を挟んだ。「それ、公称百七十センチオーバーのオレよっか

小せえぞ!？」

「……間違えた。百八十、六? とか。たしか。あ。名前は、モグゾー。たぶん」

「オレに今すぐ十センチよこせ、モグゾー!」ランタはモグゾーを小突きながら無茶なことを言う。「おまえから十センチもらったら、オレは百七十八! おまえは百七十六! 逆転! めでたい! だろ!？」

「あげたら……」

「ていうか」ハルヒロはまたランタにツツコミを入れてしまいそうになっている自分を呪うしかなかった。「百七十オーバーじゃなくて、本当は百六十八なんだ、身長」

「うっせーよ! 悪いーかつ! おまえだって、見たところオレと同じくらいだろ!」

「おれはぎりぎり百七十あるけど」

「やなヤツだな、おまえ! たかが二センチの差で人を差別する極悪人だな!」

「……ほんとうざい、こいつ」

「ああ!? よく聞こえなかったけど、何か言ったか!? 言ったな!? 言ったよな!」

「言っていない、言っていない。本当に何も言っていないから」

「嘘こけ! この嘘つき変態鬼畜野郎! オレの地獄耳を舐めるんじゃないやねえ! おまえはこう言った! この天パ野郎、地獄に落ちろってな!」

「いや、それはマジで言っていないし」

「オレのことを天パと! それだけは言っちゃならねー禁止ワードだぞ、コナクソツ!」

「だから言っていないって。人の話、聞けよ……」

「聞いているっつーの! 聞きすぎて地獄耳にタコできるくらい聞いているっつーの! とにかく、このオレを天パ呼ばわりしたら許さねえ! 処刑だ、処刑! 覚えとけ!」

「天パ」とギヤングが言って振り返った。「やかましい。黙れ」

「……はい」と天パことランタは小さくなった。「……すみません。黙ります」

ハルヒロは肩をすくめた。「許さないんじゃないのかよ」

「アホ」ランタは小声で言った。「オレは時と場所と人を的確にチョイスする男だぜ。人はオレをマスターチョイスと呼ぶ。選択王に、オレはなる!」

「勝手になれば……」

「オレは! 洗うほうの洗濯じゃねえ選択の王! 選択王に! なってみせる……!」

「天パ」ギヤングが足を止めてふたたび振り向いた。「黙れ」

「ひいっ!」ランタは素早くジャンピング土下座をかました。「ごめんちゃい……!」

「……選択王よりさ」ハルヒロはランタを見おろした。「土下座王を目指したら?」

「それか!」ランタは顔を上げて指を鳴らした。「——って、それか、じゃねーよ! 土下座王とか、かっこわるすぎだろ! いくらオレの土下座スキルが高いとしても!」

「天パ」ギヤングの声には殺気すらこもっていた。「三度目だ」

「ひいひいっ！」ランタはまた土下座して、額を石畳にこすりつけた。「ご、ご、ごめん
なさいもうしません許してくださいお願いしますうううううううううう……！」

こいつはもうとくに土下座王の域に達しているとハルヒロは思ったが、口には出さな
かった。言ったらまたあだこうだ言い返してきて、めんどくさいことになりそうだ。以
後はひよむーとある石造二階建ての前で立ち止まるまで、黙々と歩いた。

その建物には白地に赤い三日月の旗が掲げられていて、看板も出ていた。看板には、オ
レタノ刀竟義勇兵口レソトムーノ、と書いてあるが、何か変だ。よく見ると、文字の一
部が薄れるか、剝がれるかしているらしい。

「じゃーん！」とひよむーが看板を手で示した。「よーやく到着しましたですねえ。こ、
こ、がっ！ かの有名なオルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーンの事務所ですよん！」

ハルヒロは「レッドムーン……」と呟いて、看板を見なおした。なるほど。欠けている
部分を足せば、たしかにオルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーンになる。

「ささ、中に入って入って！」

ひよむーにうながされて建物に入ると、そこは酒を飲む店のホールみたいな広い部屋で、
テーブルと椅子が置いてあり、奥にカウンターが設えられていた。カウンターの向こうに
男が一人、腕組みをして立っている。あとはハルヒロたちとひよむーだけだ。

「そいじゃ、ひよむーはこのへんで！」ひよむーはカウンターの男に一礼した。「毎度の

ことですけど、皆さんに説明等々、どうかお願いしますですね、ブリちゃん！」

ブリちゃんと呼ばれた男は「はいよ」と軽く応じて、腕を組んだままひらひらと手を
振ってみせた。手と一緒に、なぜか腰もくねくね動いている。

「失礼します！ ばいばい！」

ひよむーが出て行ってドアを閉めると、室内に妙な緊張感が立ちこめた。ハルヒロたち
をじっと観察しているブリちゃんのせいだろうか。きつとそうだ。だって、見るからにブ
リちゃんはあやしい。あやしすぎる。

ブリちゃんは腰をかがめてカウンターに両肘をつき、組みあわせた両手の上に顎をのせ
た。その顎が割れている。それはまあいい。けどあの髪の色はやばい。緑色なのだ。そ
れから、口紅か何か塗っているのか、唇が黒い。長くて量の多いバサバサ睫毛に囲まれた
瞳は水色で、色はすぐきれいなのだが、それが余計に恐ろしい。頬紅もつけているし。
化粧が濃いのだ。

どこからどう見ても、ブリちゃんは男なのに。

「ふーん……」ブリちゃんは何度かうなずいて「いいわ」と上体を起こした。「こちらへ
いらっしやい、子猫ちゃんたち。歓迎するわ。アタシはブリトニー。当オルタナ辺境軍義
勇兵団レッドムーン事務所の所長兼ホストよ。所長って呼んでもいいけど、ブリちゃん
もオツケー。ただしその場合は、親愛の情をたっぷりこめて呼ぶのよ？ いい？」

「所長」ギャングはつかつかとカウンターに歩みよって、首をかたむけた。「質問に答えろ。ここがオルタナって街だってことはわかった。だが、辺境軍だの義勇兵団だのってのは何だ。なんで俺はここにいる。おまえはそれを知ってるのか」

「威勢がいいわねえ」ブリちゃんは愉快そうにふくみ笑いをした。「アタシ、嫌いじゃないわよ、あんたみたいな子。名前は？」

「レンジだ。俺はおまえみたいなオカマ野郎は好きじゃない」

「そお……」

ブリちゃんは何をしたのか、一瞬、ハルヒロにはわからなかった。速いだけじゃない、動作が滑らかで、あまりにも自然すぎた。

「レンジ。いいこと教えてあげる」気がつくのとブリちゃんは、レンジの喉元のどもとにナイフの切っ先を突きつけて、うっとり目を細めていた。「アタシをオカマ呼ばわりして長生きできたやつは一人もない。あんたは察しがよくさそうだし、アタシが言ってることの意味はわかるはずよ。それともまだ突っぱってみる？」

レンジは「そうだな」と言うなり——ハルヒロは息をのんだ。レンジはなんと、ナイフの刃を素手でつかんだ。掌や指で刃をがっちり固定してはいるが、親指の付け根あたりから血が流れてだしている。「べつに長生きしたいわけじゃないが、脅されて従うのは性に合わない。殺れるものなら殺ってみろよ、オカマ所長」

「そのうちね」ブリちゃんは黒い唇をべろりと舐めて、レンジの頬ほおをさっと撫でた。「ばかりやったげる。何度でも。アタシのこと、忘れられなくてあげちゃう」

「……おい」とランタがハルヒロに耳打ちした。「あのやるって、やるはやるでも違うほうのやるだぞ、おそらく」

「どうゆうやるなん？」とお下げの子がきよとんとした顔でランタに訊いた。

「えっ、いや、そりゃあなんつーかこう、本来、入れるべきじゃねー出てくる場所に入れまっしよ的な……ようするに、なんつーの？　なあ、ハルヒロ？」

「おれに話を振るなよ。自分で言い出したことなんだから、自分で責任とれって」

「冷てーな、おまえ……人情味欠乏症だな……人間的に絶対零度だな……」

「ま、まあ！」チャラ男キツカワがレンジとブリちゃんの間を割って入った。「初対面なわけだし！　行き違いはツキモノってことで！　ここは一つ穩便に！　明るく仲よくやっちゃわない？　ね？　ね？　俺ちゃんの顔に免じて！」

「おまえの顔？」レンジはキツカワをねめつけると、鼻で笑ってナイフから手を離れた。

ブリちゃんもナイフを引っこめて、刃についた血を布でぬぐった。「どうやら向こう見ずが何人かいるみたいねえ。男が八人で女が四人。ちよっと女が少ないけど、アタシ的にはそっちのほうがいいし、もともと男のほうが戦力になる率が高いから問題ないわ」

マナトがわずかに眉まゆをひそめた。「戦力？」

「そう」ブリちゃんはにっこり笑った。はつきり言って、なかなかききもい。「戦力よ」
 「ここは義勇兵団事務所……」マナトは目を伏せた。「——ってことは、俺たちは義勇兵
 とかってやつに？」

「あらあ」ブリちゃんはパチパチと手を打った。「あんたも見所がありそうねえ。そのと
 おり。あんたたちはこれから義勇兵になるのよ。選択の余地はあるけどね？」

「マスターチョイス」ハルヒロはランタの背中を叩いてやった。「おまえの出番だろ」
 「お、おうっ!? そ、そうだよな!? そう……なのか……?」

「あんたたちは選ぶことができる」ブリちゃんは人差し指を立てて、ひよいひよいと動か
 してみせた。「アタシのオフアーを受け容れるか、断るか。オフアーの内容は、アタシた
 ちオルタナ辺境軍義勇兵団レッドムーンに加わることに。といっても、最初は見習い義勇兵
 として、一人前の義勇兵を目指してもらうことになるけどね」

「義勇兵って……」と派手女がおつかない顔をして言った。「いったい何するの?」

「戦うのよ」ブリちゃんは、いやねえ、とでも言いたげに手をぱたりと振った。「この辺
 境には、アタシたち人間と敵対してる種族や、モンスターって呼ばれてる怪物どもがたく
 さん、たあつくさんいるの。辺境軍の任務は、やつらを駆逐して辺境を制圧すること。で
 も正直、そんなにたやすい仕事じゃないわ。実際、辺境軍はこのオルタナと前線基地を維
 持するので手一杯なのよ。そこでアタシたち義勇兵団にお鉢が回ってくるってわけ」

「つまり」黒縁眼鏡が右手の中指で眼鏡の位置を直した。「正規軍が街を守っている間に、
 義勇兵団が打って出て、敵対種族やモンスターを討伐する。そういうこと?」

「簡単に言えば、そう」ブリちゃんは両手を花みたいな形に開いてみせた。かわいいこと
 をやっているつもりなのかもしれないが、わりと不気味だ。「もつともね? 辺境軍本隊
 だって、守備一辺倒ってわけじゃないのよ。遠征して敵対種族の拠点を攻撃することもあ
 るわ。ただ、規模が大きな軍事行動には自ずと制約があるの。補給だの何だの、考えて用
 意しなきゃいけないことがたつぷりあるしね。その点、義勇兵は違う」

キツカワはふんふんふん過剰なまでにうなずいた。「どう違うんすかね?」

「アタシたち義勇兵は」ブリちゃんは合掌して指の先をうねうねさせた。「神出鬼没、縦
 横無尽に敵地に潜入し、視察して、攪乱し、敵対勢力の弱体化を図る。本隊に協力するこ
 とはあっても、組織だった作戦行動をとることはめつたにないわ。単独か、まあ三人から
 六人くらいの小団を組んでる義勇兵が多いかしらね。とにかく各自が己の才覚、独自の判
 断で情報を収集し、敵を叩く。これがアタシたち義勇兵団レッドムーンの仕事よ」

「で?」レンジは右手を開いて、握った。血は滴っていない。もう止まったのか。「その
 オファーとやらを断ったらどうなる」

「どうにもならないわよ?」ブリちゃんは首をかたむけて腰をくねらせた。おどけている
 のか。おどけつつ、脅かしているのかもしれない。かなり怖いし。「言っただしよう。あ

んたたちには選択の余地がある。選べるの。義勇兵団に加わりたくないなら、今すぐここから出て行って、二度と戻ってこなくていいわ」

「へえ……」ランタはくりくり髪を引っかきまわした。「だったら、オレはやめとつかなんかよくわかんねーけど、オレってほら、基本的に平和主義者だし？」

「そっ。じゃ、さよなら。元気でね」

「おう！ ブリちゃんも達者でな！」ランタは踵かかとを返し、事務所から出ていきかけて足を止めた。「……つーか、でも、ここ出たあとオレ、どうすりゃいいんだ？」

「そこまでは責任持てないわよお」ブリちゃんはへらへら笑った。「義勇兵団に入らないなら、あとはご自由に。見習い義勇兵になるなら、銀貨十枚、一人につき十シルバーずつあげるから、当面は暮らせると思うけどね」

「銀貨……」マナトが軽く目を瞠みはって、自分のポケットを探った。「……そうか。お金」ハルヒロもズボンの腰ポケットと尻しつポケットをさわった。何も入っていない。手ぶらなのか。もちろん無一文だ。

「バ、バイトでも……」ランタは顔を引きつらせてうなだれた。「探す……とかしか、ねーのかな、とりあえず……」

「都合よく見つかればいいけどねえ」ブリちゃんは大袈裟おおせうさに肩をすくめてみせた。「義勇兵以外の仕事だって、けっこう大変よお？ もしうまく誰かに雇なってもらえたとしても、

雀すずめの涙みたいなお給料できつい雑用とか親方や主人の身のまわりの世話からスタートってというのが相場だしねえ」

「かーっ」キツカワは自分の側頭部をぱーんと叩いた。「世知辛がらいっすねーっ。まいったな、こりゃ。もしかして、やるっきゃないな流れるな？」

「言ったはずよ？ 流れも何も、やるかやらないか決めるのは——」ブリちゃんは一同を順々に指さしていった。「あ、ん、た、た、ち」

レンジは大きく息をついた。「具体的に、まず何をすればいい」

「あーら、レンジ。アタシをがっかりさせないで？ 聞いてなかった？ 各自が己の才覚、独自の判断で情報を収集し、敵を叩く。これが義勇兵の流儀よ」

「見習い義勇兵としてまず何をするかも、自分で調べて考えろってことか」

「そゆこと」ブリちゃんはうなずいて、カウンターの上に何か並べはじめた。赤っぽい色をした硬貨のようなものと、小さな革袋だ。その組み合わせがぜんぶで十二セットある。

ブリちゃんは三日目が浮き彫りにされている硬貨のようなものを一枚つまみあげた。「これは見習い義勇兵身分証明章、通称・見習い章。そのまんま、見習い義勇兵としての身分を証明するものだから、もらったらなくなさないように。まあ、持ってもたいしていいことはないんだけどね。でも銀貨二十枚、二十シルバーでアタシから団章を買って、晴れて一人前の義勇兵になったら、それなりの特典があるわ」

「ちよっと待て」丸刈りが不穏な声を出した。「金で身分を買わせるのかよ」

「そうよ。それがどうかした？」

「気に入らねえ」

「そんなこと言ったって、お金がないとご飯も食べられないし、着るものだって手に入らない、何もできないんだから、しょうがないじゃない。いやなら野垂れ死ねば？」

レンジはちよっとだけ笑ったようだ。「地獄の沙汰も金次第か」

「ジゴク……？」ブリちゃんは首をひねった。「ま、そんなとこね。ともあれ、何をすればいいのかも自分で調べろって言っといてなんだけど、団章を買って義勇兵になるのが、第一の目標ってことになるんじゃないかしら」

「いいだろう」レンジは見習い章と革袋を手にとった。「義勇兵だか何だか知らないが、なってやる。話はそれからだ」

レンジにつづいて丸刈りが見習い章と革袋をつかんだ。少し遅れて派手女、マナト、黒縁眼鏡。キツカワは「ほいじゃ俺ちゃんもいただきーっす」と言いながら、革袋を二個とろうとしてブリちゃんに「こらアッ！」と手を叩かれた。

どうやらやるしかないみたいだ。でも何のために？ よくわからないが、金をもらうため、ひいては生きるため、だろうか。だとしたら、しょうがない。しかたないとは思うのだが、なんだか気持ち悪い。

シホルとお下げの子、ちっちゃい子も、ためらっているみたいだ。あとはランタと、巨漢のモグゾーも。

ブリちゃんが水色の瞳をこつちに向けた。「あんたたちはどうするの？」

「……なんつかなあ」ぶつぶつ言いながらも、ランタはカウンターへと向かった。「嵌められてるっぽくて微妙にヤな感じだけだよ……」

「んー」お下げの子がランタのあとを追った。「なせばなるん、なさねばなぬぬんってゆうしなあ……」

「いや」ハルヒロは首を振った。「なるんとかなぬぬんとかは言わないと思うよ……」

「ほ？」お下げの子は見習い章と革袋に手をのびしながら振り向いた。「そやったっけ。ユメ、なるんとなぬぬんですつと覚えてたんけど」

「それ間違いだから。正しくは、なせばなる、なさねばならぬ、だよ」

「そっかあ。でも、なるんとなぬぬんのほうがかわいいと思わん？ かわいいのはやっぱり重要やって、ユメは思うねやんかあ」

「……かわいさはたしかに、そっちのほうが数段上だけどね」

ユメという名前らしいお下げの子は、心底嬉しそうにちゃあど笑った。「そやろお」そんなことをやっている間に、ちっちゃい子も見習い章と革袋をとっていた。残りはモグゾーとシホルとハルヒロだけだ。なんとなくどん尻にはなりたくなくて、ハルヒロも見

習い章と革袋を引つつかんだ。革袋を開けて小さな銀貨が入っているのを確かめていると、モグゾーがゆったりした動作で見習い章と革袋を手にとった。最後はシホルだった。

「おめでとう」ブリちゃんがわざとらしい笑みを浮かべて手を叩いた。「これであんたたちは今から見習い義勇兵よ。しっかりとがんばって、さっさと一人前になってちょうだいね。義勇兵になったあどだったら、アタシも多少は相談に乗ってあげないこともないわ」

——と、突然、「おい」、鈍い音、「がっ」というような声を立てつづけにして、気がついたら丸刈りが床に尻餅をついていた。一瞬の出来事だったので見ていなかったが、もしかしてレンジが丸刈りを殴りつけたのか。殴った？　なんでそんなことを？

「立て」とレンジが無表情で言った。「——てめえ！」と叫んで立ちあがろうとした丸刈りを、レンジはすかさず蹴飛ばして床に這いつくばらせた。

「どうした、立てよ」

「……何のつもりだ、この野郎」

「おまえ、俺を最初に見たとき思っただろう。こいつは自分より強いかわかっている。答えを教えてやる。立て」

「くっそ……！」

丸刈りが跳び起きたところをレンジは狙う。傍観者のハルヒロだってそれくらいわかるのだから、よければいい。いや、丸刈りはかわそうとしているのだ。でも、レンジは丸刈

りが身をかわした先に動いて、殴る。耳をつかんで引っぱる。たまらず悲鳴をあげた丸刈りの鳩尾に、レンジの膝がめりこむ。一発じゃない。何発も連続で。それからレンジは、丸刈りの頭を両手で挟むようにつかんだ。頭を思いきり振りかぶって、頭突きをお見舞いする。ものすごい音がした。丸刈りは崩れ落ちるように膝をついた。

「……そうとうな石頭だな、おまえ」レンジは指先で額をさすった。赤くなって、少し血がにじんでいる。「名前を教えろ」

丸刈りは床に手をつかないで膝を押さえている。四つん這いになってたまるものかとこらえているのかもしれない。「……ロンだ。強えな、てめえ」

「おまえもだいたい頑丈だ。俺についてこい、ロン」

「ああ。しばらくはついてってやる」

「それでいい。あとは——」レンジは事務所内を見まわして、マナトに目をとめた。

マナトはレンジの視線を受け止めて、かすかに両目をすばめた。

レンジはすぐにマナトから目をそらし、黒縁眼鏡を見た。「おまえは戦力になりそうだ。俺と一緒にこい」

黒縁眼鏡は腕組みをしてまばたきをした。そして眼鏡の位置を右手の中指で直してから、顎を引くように首を縦に振った。「いいよ。僕はアダチ。よろしく、レンジ」

レンジは唇の片端をつりあげて応えると、ハルヒロに目を向けた。

え？もしかして、おれも……？

驚いたし、ちょっと胸が躍った。だって、レンジは見るからに腕っ節が強そうで、丸刈りロンを簡単に打ち負かしてしまう程度には実際、強い。行動力もある。頭の回転も速そうだ。おっかなくてつきあいづらそうだが、それさえなんとかできれば間違いなく頼もしい。連れていってもらえたら、この先きつと楽だろう。

そんな気持ちがあったとは言えない。あった。だけどすぐに萎んでしまった。肝心のレンジが別のほうを見たからだ。スルーされた。

「そのチビ」

「……あいつ？」

十二人の中でもっともちっさい女の子は、声も小さかった。

レンジは「こい」と手招きした。チビちゃんはポーッとしているのか。ふらふらと近づいていって、レンジを見上げた。レンジはチビちゃんの頭を撫でた。

「おまえは役に立ちそうだ。ついてこい」

チビちゃんは「……あい」とうなずいた。顔が真っ赤だ。ゆでだこみたいになっている。顔だちよりも、仕種とか存在感とか、マスコットみたいに愛らしい。でも、役に立ちそうか。どうなのだろう。というか、ハルヒロはチビちゃんよりも役立たずだとレンジは判断したのか。それってなんか——悔しいっていうか、せつないっていうか。

「行くぞ」レンジが顎をしゃくって事務所の出口を示した。ロン、アダチ、チビちゃんとレンジの四人が歩きだそうとしたら、派手女が「待って！」と声をあげた。「あたしも連れてって！」

レンジは短くため息をついた。「使えないやつはいらない」

「何でもするから！」派手女はレンジにすがりついた。「あたし、サッサ。お願い。どんなことでも、あたし、やるから」

「どんなことでも、か」レンジはサッサを突き放した。「忘れるなよ、その言葉」

「うん。忘れない」

「それと、俺に勝手にさわるな」

「……わかった」

「よし。おまえもこい」

「ありがと、レンジ！」

サッサがドアを開けて、レンジたちがぞろぞろと出てゆく。サッサは最後だった。ドアが閉まって、まるで敗残者が落選者みたいな七人が取り残された。

「……ひゃあーっ！」キツカワが顔をしかめて頭を掻いた。「俺ちゃんもチーム・レンジに入れてもらいたかったなあ。レンジ&ロンでたぶん喧嘩無敵っしょ。アダチは頭よさそうだしチビちゃんかわいしいサッサ美人だしウハウハだし。うああーいいなあー。でもま

あ言ってもしょうがないよね。俺ちゃん情報収集行ってきまーっす。グッバーイ！」
 「あっ……」という間に、キッカワも事務所をあとにした。ハルヒロはなんとなくシホルと顔を見合わせた。シホルはうつむいてしまった。

「じゃあ、俺も」マナトが出口のほうへと向かった。「ここにいたって何もわからないし、外に出ていろいろ見てくるよ。みんな、またあとで」

「うん、また——」ハルヒロは手を振って見送りながら、マナトについていったほうがいいんじゃないかと思っていた。マナトはレンズと違ってとっつきづらくない。性格がよさそうだし、おそらく頼りになる。けどドランタはいいとしても、シホルとユメはどうするつもりなのだろう。モグゾーもいる。そうだ。

みんなで一緒に行けば解決じゃないか。——と思いついたときにはもう、マナトの姿は事務所になかった。でも、まだ遅くないはずだ。

「あのさ、ここにもほとんどにしようがないし、全員でマナトを追いかけて——」

ハルヒロがそこまで言ったところで、ドアが開いた。マナトが戻ってきてくれたのかも知らない。そう思ったが、違った。事務所に入ってきたのは別の男だった。皮革製の上下を着て、羽根飾りの付いた帽子を被り、弓矢を背に負っている。ハルヒロたちよりもいくつか年上だろう。男は狐みたいな目をしていて、口許がゆがんでいる。

「こんちはっす、所長」



「あら」ブリちゃんが男のほうに顔を向けた。「クズオカっぢゃない。どうしたの？アタシに何か用？」

「いや、そうじゃなくて」クズオカと呼ばれた男はハルヒロたちを一瞥した。「新人りがきたって話を聞きつけたんで、ちよっと」

「耳が早いわねえ。でも今回は十二人で、ここにはもうその五人しか残ってないわよ」

「何だ。それじゃあ、あぶれ者かあ」

ランタが表情をこわばらせた。「……あぶれ者で悪かったな」

「悪いーに決まってるんだろ？」クズオカはランタを睨みつけてから、ハルヒロたち四人を品定めするような目つきでざっと見た。「……ふーん。ま、足りないのは前衛だし、そこのでかいやつ、おまえでいいや」

モグゾーは自分を指さした。「……ぼく？」

「そうだよ。おまえだよ。でかいやつって言ったら、どう考えてもおまえだろ。俺たちのパーティに入れてやるからさ。あれこれ教えてやるし。金だつて少しなら貸してやる。めちゃくちゃいい話だろ。わかつたら、こいよ」

「う、うん……」

「モグゾー、行くのかよ!?」ランタはモグゾーの左腕をつかんだ。「やめとけて！ そいつ、あからさまに陰険そうだぞ！」

「あ、うん……」

「いいからこい！」クズオカが右腕を引っぱった。「見習いが義勇兵のパーティに入れてもらえるなんて、それだけでありがたい話だろ！ あと俺は陰険じゃねえ！」

「う、う、うん……」

「モグゾー、騙されんな！ 陰険なやつが自分は陰険だつて言うわけねえんだ！」

「あ、あ、う……い、痛……いん、だけど……」

「おっ」ランタは手を離れた。「ごめんごめん、あ——」

「よっし、今だ！」クズオカが猛然とモグゾーを引きずってゆく。

シホルが肩を落とした。「……行っちゃった」

「これで……」ユメが一、二、三と数をかぞえながら、ハルヒロ、ランタ、シホル、そして自分を順番ずつ指さした。「四人かあ」

「あんたたち」ブリちゃんはあくびを噛み殺した。「いつまでそこにいるつもりなのよ。アタシだって仕事があつてわりと忙しいし、何もしないで突っ立ってるだけなら、いいかげん追いだすわよ？」

ランタが負け犬のような目でハルヒロたちを見た。「……出るか」

ハルヒロもたぶん、ランタに負けず劣らず情けない顔をしていると思う。「うん……」

2. 暮れる途方に

義勇兵团レッドムーン事務所を出たはいいものの、いったいどうすればいいのか。情報を集めるといっても、ハルヒロたちはこのオルタナという街のことを何も知らない。知りあいてもいないから、伝手もない。レンジたちも、キツカワも、マナトも、それからクズオカとモグゾーも、近くにはいないようだ。もうどこかへ行ってしまったらしい。

お手上げだ。

ハルヒロとランタ、シホル、ユメの四人は、しばらく事務所の前で呆然としていた。

「……どう、しましょう？」

第一声を発したのはシホルだった。なんで訊くんだよ、こっちが訊きたいよ。ハルヒロはそう思わなくてもなかったが、相手は女の子だし、そんな言い方もできない。

とりあえず、「どう……：しようか」と訊き返してみたら、三秒後にシホルが「どう……：しましょう」と返してきた。

「おまえらなあ」ランタがわざとらしくため息をついた。「もうちよつとねーの？　なんつーか、主体性？　みたいななの。どうしようとか言ってる場合じゃなくね？」

「そう言うおまえはどうなんだよ……」

「オレはちゃんと考えてるっつーの。これからどうしようかなーって」

ユメがくすくす笑った。「おんなじやんかあ」

「まーな」ランタはいたずら小僧みたいに鼻の下をこすった。「そうとも言うな」

正直、やばい、とハルヒロは思わずにいられなかった。あぶれ者、とクズオカに言われたが、まさしくそのとおりかもしれない。何も決められない、行動できない四人だけが残されて、力をあわせてなんとかしようとするでもない、ただなんとなくここにいる。ひよっとして、これって最悪のパターンなんじゃ……。

ランタが「いいよなあ、モグゾー……」と、ハルヒロも内心ちよつと思っていないでもないことを言った。「クズオカはクズっぽいけどよお。経験者っつーの？　いろいろわかってるっぽいやつパーティに入れてもらえたら、とりあえずは安心じゃん。楽ちんかもしれないわけじゃん。つーか、なんでモグゾーなんだよ。そこはオレを選べよ。オレのほうが絶対使えるって。マジで……マジで……」

「そうなんかなあ」とユメがほわほわした口調で言ったので、ハルヒロも「そうとは思えないよなあ」と軽く同調してみた。

「おまえらなあ……」ランタはハルヒロとユメをピッと指さした。「おまえらはオレの実力を知らねーからそんなことが言えるんだよ！　言っとくけどな、オレは実力者だぜ！　乳飲み子のころから隠れた実力者って呼ばれて有名だったんだからな！」

「有名だったんなら、ぜんぜん隠れてないだろ」

「細けーこと気にしてんじゃねーよ。疲れるぞ？」

「おまえの相手してるせいで、もう微妙に疲れてきてるよ……」

「体力ねーな。ハルヒロ、おまえはマジ使えねーな。ダメだな。ダメダメだな」

「天パしか取り柄がないランタには言われたくないんだけど」

「天パって言うな！」

「取り柄だっけ言っただろ。天パはおまえの唯一のいいところだろ。天パだけは」

「そ、そうかあ？ いいかな、天パ？ なんかどうも納得いかねーんだけど……？」

「ユメ、髪、まっすぐやんかあ。そしたら、髪くるくるってなってる子おがうらやましいから、ランタいいなあって思うよ」

「そ、そお？ オレの天パって、そんなにいい感じ？ マジで？」

「うん。髪くるくるやったら、頭もくるくるばーっぼくて、ちよっとかわいいしなあ」

「え、かわいい？ いや、どうなんだろう？ 男が女にかわいいとか言われるのって、まあ悪い気はしねーけど——って、頭くるくるばーって馬鹿っばいってことかーっ！」

「……っ」と息を吸いこむような音がした。

見ると、シホルが肩を震わせて、両手で顔を覆っている。

ランタが「うえっ……!!？」と目を剝いた。ユメもシホルに視線を向けてまばたきしている。ハルヒロも当然びっくりしていた。な、泣いてる……？

「ど、どうした……の？」ハルヒロはシホルの背中に手をふれようとして、途中でやめた。さわるのはまずいか。女の子だし。

「……な、なんでも……」シホルは明らかにしゃくりあげている。「なんでも……ない、です……少し、不安になっただけで……」

「あ……」

考えてみればそうだよなあ、とハルヒロは思う。こんな状況でくだらないことをくっちゃべっているハルヒロたちのほうがおかしくて、泣きだしたシホルはむしろ、まともなのかもしれない。

「よし、よし」とユメがシホルの背中を撫ではじめた。「いーこいーこ。だいじょぶだいいじょぶ。どのへんがだいじょぶなんか、ユメにはようわからんけどもなあ」

ランタは洗面をつかった。「フオローになっただけでねーぞ、それ……」

「や、けどさ……」ハルヒロは首筋を掻いた。「さすがに何かしないとまずいっばいよね。黙ってても、あれだし。何だろ。たとえば、ほら、クズオカって人みたいな義勇兵は他にものいるだろうから、探してつかまえて話を聞く……とか？」

「じゃー頼んだ！」ランタはハルヒロの肩を叩いた。「ズバーツと見つけて、話でも何でも聞いてきてくれ！ うん、ハルヒロ！ おまえにぜんぶ任せた！」

「……すがすがしいほどの人任せっぶりだな」

「いっそ爽やかだろ？」
「すげーむかつくよ」

「はつきり言つて、おまえごときにむかつかれたところで、オレは痛くも痒くもない！」
「最低かっ」

「うっせーんだよ。言い出しっぺなんだから、おまえがやれ。そういうもんだろ、物事ってのはだいたい。あ、わかった、じゃー手分けしようぜ。ハルヒロ、おまえは義勇兵を探しだして情報をゲットする係な。シホルは落ちこみ係で、ユメはシホルの慰め係。オレはここでおまえの帰りを待ってやる係っつーことで！」

「ランタ、おまえ、そこまで何もしたくないのかよ……」
「どうしてもっつーならしてやってもいいけど、楽しいこと以外はヤだ」

「楽しいとか……それどころじゃないよね？」

「一番大事なことだろ。オレは人生をエンジョイしたい派なんだよ。エンジョイできねー人生なんてオレの人生じゃねーんだよ。おまえはどうなんだよ、ハルヒロ。人生エンジョイできねー派か？ 眠たそうな目えーしやがって」

「この目は生まれつきだし！」ハルヒロはランタに食つてかかろうとして、深いため息をついた。「……いいよもう。行つてくる。探してくるから、義勇兵」

「やつとその気になったか。つーか、だったら最初からやれよ。めんどくせーやつだな」

殴ろうかな、とも思ったが、やめておいた。こんなやつを殴ったら自分の手が、魂が汚れる。殴るだけの価値もない男だ。

ハルヒロはシホルとユメに「ちよつと行つてくるから、ここで待つて」と声をかけて、事務所前をあとにした。でも、まったく本当にどこへ行けばいいのか。

太陽の方向がおおよそ東だろうから、あっちが北でこっちが南、西はあっちだ。

北のほうにかなり高い、塔のような城のような建物がそびえている。あの建物は目印になりそうだし、とりあえず見に行つてみようか。そんな思いつきから北に向かうことにしてみたが、ハルヒロは観光しているわけじゃない。いいのか、これで。

きつとレンジたちはうまくやっているだろう。マナトもたぶん、なんとかしてしまっていると思う。よすぎるくらい調子がいいキツカワあたりは、今ごろ誰彼かまわず声をかけていそう。モグゾー、クズオカに騙されてなきやいいけど。騙されてさえないければ、案外、一番順調なスタートを切っているかもしれない。

「……人に訊いてみるしかないかな」

誰だっけ。そのへんを歩いてる男女に、まず——何を尋ねれば？ 義勇兵。そう。義勇兵について教えてもらう。義勇兵はどこにいるのか。

決心して、通行人を物色する。年齢性別は問わない。気さくそうな人。大半の通りがかりと目が合う。皆、ハルヒロを見ているのだ。めずらしいのか。めずらしいのだろう。服

装があからさまに違うし。

どれもこれも、あまり友好的な眼差しじゃない。異物を見るような目というか。そんな気がするだけだろうか。勘繰りすぎか。

「……けど、ハードル高いって。それとも、おれが臆病すぎ……?」

勇気よ出る、出てくれ、と念じながら、ハルヒロは見知らぬ街並みを歩いた。

まあ、そのうち何かの拍子にスイッチが入って、すみませーん、みたいにいけるんじゃないかという考えも頭の隅にはなくなる。早くそうなってくれるといいんだけど。なっってくる前に、ついちゃったし。

塵一つ落ちていない広場の向こうに、あの高い建物がそそり立っている。どうやら石造らしい。周りの建物が平屋か二階、せいぜい三階建てくらいだから、余計にそう見えるのかもしれないが、やっぱりいぶん高い。堅牢そうだし、窓や門などに細かくきれいな裝飾が施されていて、とても立派だ。広場の各所や門の前に、鎧兜を身につけて槍と盾を持った衛兵らしき男たちが配置されている。嚴重に警備されているみたいだから、あの建物には偉い人が住んでいたりするのもかもしれない。たとえば、市長とか。

広場のだ真ん中でぼんやりと建物を見上げていたら、衛兵が鎧だの何だのをガシヤガシヤ鳴らしながら近づいてきた。「そこで何をしている。天望楼に何か用でもあるのか」

「え? テンボーロー? あ、いや、べつに用は……」

「ならば立ち去れ。辺境伯閣下の平安を乱す者としてしよっぱかれたくはなからう」

「しよ、しよっぱかれたくは……ないっすね。たしかに。はい。ごめんなさい」

ハルヒロは足早に広場を出た。よくわからないが、辺境伯閣下とかいうのがあの天望楼とやらに住んでいる人の名前——ではないか、おそらく肩書きだ。初めて情報らしい情報を入手したような気がする。あんな目立つ建物に住んでいるくらいだから、この街の住民なら誰でも知っていそうな情報ではあるけど。

「オルタナ。辺境伯。閣下。天望楼。辺境……辺境軍。義勇兵団。義勇兵、か……」

覚えた単語を小声で呟きながらさらに北へ向かうと、行く手が妙に賑わっていた。何だろう。店か。通りの両側に屋台や露店がびっしりと立ちならんでいる。まだ準備中の店もあるようだが、半分以上の店は営業しているみたいだ。店先には食べ物やら衣類やら雑貨やら、種々雑多な品物が大量に並べられていて、行き来する人々を呼び止めようと威勢のいい声がさかんに飛び交っている。

「市場、みたいなの……?」

ハルヒロは誘われるように市場の中へと足を踏み入れた。活気がすごい。品物についている値札には1Cとか3Cとか12Cとか書かれていて、読めることは読めるが何のことやらさっぱりだ。「にいちゃん! 買ってけ!」だの「お兄さん、寄ってって!」だのと声をかけられるたびに、つい無視したり、逃げてしまったりする自分の気の弱さが憎らしい。

でも、間もなくやたらといい匂いにおが漂ってきて、テンションが上がった。
「肉……」

よだれが出てきた。肉だ。あの屋台、肉を串刺くしざしにして焼いている。あっちの屋台では大きな鍋なべでスープか何かを煮こんでいるし、別の屋台にはパンらしいものが山と積まれていた。パンに何かを挟んで売っている店もあった。向こうの店には饅頭まんじゅうみたいなものが並んでいる。この湯気。煙。香り。たまらない。ハルヒロは腹を押さえた。胃のあたりがせつない。どうして今まで気づかなかったのか。かなり腹が減っている。

「や……でも、シホルとかユメが待ってるし。ランタはどうでもいいけど、おれだけ食うっていうのも、なんか……だけど、腹が減っては戦はできないっていうし……実際、食べないともう歩けないっていうか、歩きたくないっていうか……すみません！」

矢も楯たてもたまらず、ハルヒロは串焼き肉の屋台に突撃した。もどかしい手つきで革袋から小さな銀貨を一枚とりだす。これで買えるのか。足りるのだろうか。足りなかつたら、そのときはそのときだ。

「こ、これで一本、もらえますか!？」

「ええ!？」肉を焼いていた太鼓腹の男は、目を丸くした。「ぎ、銀貨一枚って、そんなにいらぬよ!。うちの串肉は一本四カパー、ほら、ここに書いてあるだろ。まからぬけど、それ以上はもらわぬっていうのが、串肉ドリーのやり方なんだからさ!」

「四カパー……」ハルヒロは銀貨を見つめた。「——って? えっと……この銀貨じゃ買えないってことですか?」

「だから、銀貨一枚が一シルバーだろ? 一シルバーは百カパーだから、串肉二十五本分ってことだね。でも、そんなに食べないだろうし、まだ昼前だから手許てもとに五十カパーくらいしかないしさ。お釣りは出せないし」

「あ、そのカパーっていうのは……?」

「銅貨に決まってるだろ」太鼓腹の男は、見習い章に似ている、でも一回りか二回り小さい硬貨を見せてくれた。「これだよ。まさか、知らないわけじゃないだろ? だけどあんた、変な格好してるね。あつ、もしかして義勇兵かい?」

「え、や、義勇兵……じゃなくて、見習いなんですけど。なったばかりっていうか」

「ああそう。そうなんだ。義勇兵はだいたい変わってるもんなあ。何? 銅貨は一枚も持っていないの? 銀貨はあるの?」

「ない……ですね。一シルバーが百カパー……」ということはハルヒロが今、持っているのは十シルバーで、千カパーに相当するわけか。串肉二百五十本分。串肉は一本でなんと一食分になりそうな大きさだ。ということは二百五十食。一日三食で八十日分以上だから、かなり食いつなげる。「……なっというてよかつた。見習い義勇兵」

「銅貨も知らないってことは」太鼓腹の男は口をひん曲げて、鼻から息を吐いた。「当然、

ヨロズ預かり商会も知らないだろうな。行ってみたらどうだい。あそこなら両替してくれるし、手数料はとられるけど、金を預かってもらえるよ」

「ヨロズ、預かり商会……」

「場所はね、この市場を南、天望楼側から出て、一本、二本、三本目を左に曲がつてすぐのところだよ。看板が出るから、まあわかると思うけどね」



3. ヨロズちゃん

ヨロズ預かり商会。たしかにその倉みたいな石造の重厚な建物にはそういう看板が出ていた。なんと、金で文字が浮き彫りにされているという少し悪趣味な豪華さだ。

迷わずにたどりつくことができたので、ちょっと気分がいい。問題は空腹なことだ。ここで両替してもらって、早く串肉ドリーにとつて返し、串肉を貪り食わないと死んでしまう。

正面の玄関をくぐるとホールになっていて、石段の先にカウンターがあった。カウンターの前には短い列ができていて。列の最後尾について待っていると、間もなく「次！」と呼ばれてハルヒロの順番になった。

カウンターの向こうには巨大な革張りの椅子いすがあって、椅子の大きさは裏腹に十歳かそこらの少女がちょこんと、それでいて、でーんと座っている。紅白に金を配したド派手な衣を身にまとい、金縁の片眼鏡をかけたうえに金の煙管たばこまで持っていて、やたらと態度がでかい。

「んー」少女は煙管を口にくわえてスパーツと一服しながら、ハルヒロの顔をじろじろと眺めた。「見ない顔だな。初めてか？」

「……はい」と返事をする、なんだかみじめな気持ちになった。こんな小さな女の子に、はい、なんて。ハルヒロは咳払いせき払いをした。「初めて、で……だけど？」

「見るからに見習い義勇兵という感じだな。そうか。新入りか」少女は椅子の上で立てた膝ひざをぴしゃりと打った。「私はヨロズ。四代目ヨロズだ。ヨロズの常として、姓名、顔風体、預金残高から取引履歴まで、ヨロズに記憶できないことはない。とはいえ、帳簿は一応つけることにしている。人はヨロズほど物覚えがよくないからな。というわけでさっそく、君を帳簿に登録しよう。君、名は何という？」

「あ……おれは、ハルヒロ」

「なるほど」ヨロズは身を乗りだしてカウンターの前に置いてあった帳簿を開き、羽根ペンで何か書いた。「——よし。これで今から、君と当ヨロズ預かり商会は取引可能だ」

帳簿をのぞきこむと、まっさらにかぎりなく近いページに、流麗な字体で、ハルヒロ、と記されていた。目線を上げると、ヨロズの顔が至近距離にあった。背は小さいようだが、

十歳ということはなさそうだ。もう少し上かもしれない。奇妙な身なりを度外視してよく見ると、目鼻立ちがくっきりしていて、青い瞳は精巧な硝子細工みたいだし、薄紅色の唇はぶるっとしている。そうとうな美少女だ。

「何だ」ヨロズは口を尖らせて、ぶいっと横を向いた。「……ヨロズの顔をそんなにまじまじと見るものじゃない。この無礼者め」

「あ、ごめん」

「言っておくが」ヨロズは煙管をハルヒロの鼻先に突きつけた。「四代目ヨロズは若かりしとも完全無欠のヨロズだ。舐めたらえらい目に遭うのだからな。肝に銘じておけ。あと、ハルヒロ、君のことは無礼者としてばっちり記憶した」

「……それはできれば忘れてほしいんだけど」

「無理だ。ヨロズはヨロズだから忘れない。もし忘れるようになってしまったら、ヨロズは次のヨロズにヨロズの座を譲り渡さないといけないのだ。それがヨロズの掟だ」

「なんか……敵しいんだね、ヨロズって」ハルヒロはホールを見まわした。たまたまなのか、客は今、ハルヒロだけだ。従業員らしき者の姿もない。「……この預かり商會って、ひよっとしてきみが一人でやってるの？」

「そんなわけがなからう。ヨロズは当商會の象徴にして会長にして頭取だ。金や荷物の運搬、各種鑑定、倉の管理などのために、大勢の番頭、手代、丁稚たちが当商會で働いてい

る。君は当商會の営業内容を承知しているか？」

「ええと、金を預かってもらったり、両替してもらったりできるって」

「金だけではない。当商會では物品を預かることもできる。預かり料は金の場合、預かり金の百分の一、物品の場合は、鑑定評価額の五十分の一だ」

「百分の一……」銅貨百枚預けたら一枚とられる、ということか。「……地味に高い？」

「そう思うのならば」ヨロズは煙管をくわえて一吸いした。「預けなければいい。当商會は一向に困らないぞ。ヨロズに言わせてもらえば、君のような見習い義勇兵はとくに、当商會のありがたみをだんだんと理解するようになるはずだがな。で、今日は当商會に何用があったてきたのだ、無礼者」

「無礼者って……」もしかして、この先ずっと無礼者呼ばわりされつづけるのだろうか。ハルヒロは革袋から銀貨を一枚、いや、二枚出した。「これを銅貨に両替してもらいたくて、きたんだけど」

「ふむ。ちなみに両替はすばらしいことに無料で、銀貨二枚だと銅貨二百枚になるが、ずいぶんかさばるといことは理解しているか、無礼者」

「あ」ハルヒロは串肉ドリーの太鼓腹を見せてくれた銅貨を思いだした。かなり小振りな硬貨だったが、二百枚ともなるとけっこうな重量だろう。「……そっか。金をたくさん持ち歩くのもそれなりに厄介なんだ。だから預かり料を払って預ける人もいるのか」

「まあ、そういうことだ。なお、ヨロズは一カパーの百分の一まで瞬時に計算可能だから、銅貨一枚預かったとすれば百分の一カパーが預かり料となる。これはヨロズが記憶して、帳簿にも記載され、累積一カパーを超えた時点で預かり金から差し引かせてもらう。九十九カパーずつ小分けに預けるといった無駄な真似はしないことだぞ」

「ようするに、ずるはできないってことだろ。わかったよ」ハルヒロはカウンターのの上に銀貨を一枚だけ置いた。「じゃ、両替は銀貨一枚で」

「よかろう」ヨロズがカウンターに置いてあった鐘を煙管で叩くと、奥の扉から銀ピカの衣を着た少年が出てきた。ヨロズは少年のほうを見もせず指を動かして何かサインを出した。すると少年は無言で一礼して扉の向こうへと引き返し、間もなく黒い盆を手に戻ってきた。盆の上には銅貨が載っている。少年は盆をカウンターに置いて下がった。

「銅貨百枚、百カパー也。受けとるがいい、無礼者」

「だからその無礼者っていうの、やめてくれないかな……」ハルヒロはぶつくさ言いながら銅貨を手にとって革袋に詰めた。銅貨は小指の先くらいの大きさだが、百枚もあると革袋がばんばんになった。「……わりと重いし。これだと、ポケットに入らないかも」

ヨロズは、ふふん、と鼻を鳴らした。「さっそくいくらか預かってやってもよいのだが。君は無礼者だが、顧客は大切にするのが当商会のモットーなのだ」

「いいよ、とりあえずは。持って歩けばいいし。ちょっと邪魔だけど」

「そうか」ヨロズは煙管をくわえて一吸いした。「ならば必要な際にまたくるがよい、無礼者。当商会は年中無休、営業時間は朝七時から夜七時まで、いつなりと何なりと、この四代目ヨロズが当窓口にて用命を承ってやるのでな」

「いつなりと？ 昼休みとかは？」

「そんなものはない。七時から七時までヨロズはここにいます。これもヨロズの掟なのだ」

「……ご苦労さま」
しっかりとしてるけど小さいのに大変だなと思いつながらヨロズ預かり商会を出ると、腹の虫が鳴った。肉だ。串肉が待っている。ハルヒロは大急ぎで市場の串肉ドリーに戻り、うまさうな匂いを胸一杯に吸いこんでから焼きたての串肉を一本買った。我慢できなくてその場で口に入れると、香ばしさとあふれる肉汁の刺激が脳天を直撃した。

「う、ま……っ！」

夢中で一本平らげて、もう一本買うか買うまいか真剣に悩んだが、苦心惨憺して自制した。ランタはどうでもいいが、シホルとユメに教えてやってあとでまた一緒にしよう。ハルヒロは上機嫌で市場を通り抜けて、はっとした。

「やばっ。串肉とか食ってる場合じゃないし。情報収集しなきゃだめなのに……」

あたりを見まわすと、花園通りと書かれたアーチ状の看板が出ている通りが目に入った。そっちのほうから白っぽい格好をした若い男が歩いてくる。男は金属製の鎧よろいの上にマント

を羽織り、盾を背にくくりつけて腰には剣らしきものを帯びているもの、天望楼の衛兵とは雰囲気が違う。なんとなく、だが——もしかして、義勇兵なんじゃないかとハルヒロは思った。

胸を押さえて、ふう、と息を吐く。よし、と気合いを入れて「あの！」と声をかけると、男は立ち止まってハルヒロのほうに顔を向けた。「何か?」

「ええと、あの、すみません、間違ってたらごめんなさい、義勇兵……の人ですか?」

「そうですか」男は目をばちばちさせてから、相好を崩した。「ああ。ひよっとして、きみは見習い義勇兵?」

「あ、そ、そうです! さっきなつたばつかりで! なんていうか、右も左もわからないみたいなそんな感じで、それで……」

「最初は誰でも同じですよ。迷いながらも一步一步、着実に進んでゆけば、道はおのずと見えてくるものです」

「そんなもの……なんですかね。いやあ、でも、かなり先行き不安っていうか……」

「わかります」男はやさしげな顔をうなずかせた。「ですが、今の経験が必ずあとと生きてきますよ。闇の中を手探りで進めない者は、どのみちどこにもたどりつけません」

「そう……なんですか? や、だけど、なんていうか、できたら、その……」

「僕はオリオンのシノハラといいます」

「あ、おれはハルヒロです」

「ハルヒロくん。僕らオリオンはよくシェリーの酒場という店にいます。何かあれば訪ねてきてください」

「え? あ……はい、しえ、しえりーの酒場、ですか? お、おりおん……?」

「はい。幸運を祈っています、ハルヒロくん。それでは、また」

シノハラはにこやかに爽やかな気配だけを残して行ってしまった。

「……情報収集、失敗?」

ハルヒロはうなだれた。引き止めて食い下がるべきだったか。でも、やわらかく、それでいてはっきりと拒絶されているような雰囲気だった。そんなふうには見えなかったが、じつは意地の悪い男なのか。それとも、先輩としての教育的指導みたいな?

「酒場、か……」

ハルヒロは空を仰いで、まばゆい太陽に目を細めた。よくわからないが、まだ酒場という時間じゃないような気がする。やむをえず花園通りを歩いて、義勇兵らしい者の姿を探してみた。何人か行き会ったが、目があうと睨みつけられたり、あからさまにおっかない面相だったり、見るからに荒くれ者風だったりして、とても声なんてかけられない。

「もういやになってきた……」

花壇があって宿屋らしい大きめの建物が並ぶ花園通りを抜けたところで、ハルヒロは道

端にしゃがみこんだ。そのまましばらくじっとしていた。

こんなふうにしていたら、誰か気にして話しかけてくれるんじゃないか。そんな魂胆はなかった。いや、本当はちよっぴりあった。

「……おれ、考えが甘いのかね」

でも、しょうがなくね？ だって、ここがどこかもわかんねーし。名前くらいしか覚えてないとか、意味わかんねーし。突然、見習い義勇兵とかになっちゃってさ。何だよそれみたいな。ぐずぐずしてたら、要領のいいやつらはさっさとどっか行っちゃうし。残ったやつらは頼りになんねーし。自分も頼りねーし。それなのに、なりゆきで情報収集とか一人でやる羽目になっちゃってさ。さっぱりうまくいかねーし。

「そりゃいじけるって……」

いじめて何が悪い。自暴自棄になってもおかしくない。そうだ。串肉くしにくを食べよう。一人で食べられるだけ食べてやろう。串肉だけじゃなくて、市場には他ほかにもいっぱいおいしそうなものがあった。片っ端から食ってやる。夜になったら酒場に行こう。どこかに女の人が酌してくれるような店だってあるかもしれない。酒でも何でも飲んでやる。遊ぼう。有り金が尽きるまで遊びまくってやる。

「しないけど」

ハルヒロは立ちあがった。なかなか前向きにはなれそうにないが、やけっぱちになるの

も意外と難しそうだ。

逆方向から花園通りを通り抜けて、市場のほうへと引き返した。

さてどうしよう。いったん事務所前に戻るか。ほとんど成果はないが、あれからけっこう時間が経たった。みんなきつと腹を空かせているはずだ。何か食べるとしたら、ヨロズ預かり商會に連れて行って両替させないといけない。

だけど考えてみれば、ヨロズの件も有用な情報だ。シノハラとも出会った。飯を食ってから全員でシェリーの酒場を探すという手もある。

だいたい、ハルヒロが一人で頑張らなければいけないわけでもないだろう。そうだ。そうだよ。みんな当事者なんだから。

というわけで、勇んで事務所前に帰ることにしたのだが、妙だ。天望楼の位置からして方向は間違っていないはずなのに、どの角を何回曲がっても事務所が見えてこない。

「……迷子になった、とか？」

認めたくない。でも認めるしかなさそうだ。しょうがない。ハルヒロは天望楼めがけて進んだ。広場に出たら、慎重に道を確認する。最初に広場まできた道はたしか、あれだ。

あの道を行けば、ちゃんと事務所前に戻ることができる——と思う。たぶん。「いや、ていうか、ほんとにあの道でよかつたっけ……？ あっちか？ 違うか。違うのかな。どうだったっけ。わ、わかんなくなってきた。やばい……」

「ハルヒロ！」

「へ？」

誰かに名前を呼ばれるなんて想像だにしていなかったので、わりと仰天した。

声の主は後光がさしているように見えた。もちろん錯覚だが、手をあげて急ぎ足で近づいてくる彼の笑顔は冗談抜きでまぶしかった。

「マナト……！」ハルヒロはマナトに駆けよった。「マナト！ おれ、事務所に戻ろうとして戻れなくてさ！ 地獄で仏って、たぶんこのことだよ！」

「大袈裟すぎ」マナトは周囲に視線を巡らせた。「ハルヒロ、一人？ 他は？」

「あー。ランタとシホルとユメが、事務所の前にいる……はず。シホルが泣きだしちゃってさ。それで、おれが一人で情報収集してくるから待ってて、みたいな流れになっ

「そういうことか。じゃあ、いろいろわかって、みんなのところに帰る途中？」

「まあ……」ハルヒロは首筋を掻いた。見栄を張りたい気持ちも少しはある。だけど嘘をついてもすぐばれそうだし、意味がないだろう。「わかったってほどわかってないんだけど。何だろ。ヨロズ預かり商会のことくらい……？」

「ヨロズ、預かり商会？ それ、俺は知らないな」

「嘘？ マジ？ 金を預かったりとか両替とかしてくれるとこなんだけど。なんか、それなりに重要っぽいよ。あ、あと、市場にうまい申肉屋が……いや、これはいいか」

「市場は俺もちらっとだけ見たけど、申肉屋なんてあるんだ。そんなにうまいんだったら、食べてみたいな」

「教えるよ、店の場所。ばっちり覚えてるから。……事務所までの道は忘れたけど」

「じゃあ、一緒に行こうか」マナトはあたりまえのようにさらっと言った。「俺もちょうど今、一回事務所に戻ってみるつもりだったから」

「えっ……」ハルヒロは思わず絶句した。

たしかにマナトは「みんな、またあとで」と言い置いて事務所から出ていった。あれは、でも、普通の挨拶か社交辞令みたいなものだろう。ハルヒロはそう受け止めていた。違ったのか。マナトは本当に、情報を集めたら事務所に戻るつもりでいたのか。

胸の奥のほうがじんわりと熱くなった。

マナトが「ん？」とかすかに首をかしげた。「どうかした？」

「ど、どうもしないけど!？」ハルヒロはマナトの背中を叩いた。「い、行こう。事務所。ランタはどうでもいいけど、きつとシホルとユメは心細がってると思うし」

「うん」マナトがうなずいて歩きだした。そのあとをついてゆきながら、ハルヒロはあらためてマナトと再会できてよかったと思った。

マナトが微塵も迷うそぶりを見せずにすたすたと行く道は、ハルヒロがこっちだろうと見当をつけていた道と違う。

ハルヒロは帰り道をちゃんと覚えていなかったのだ。

4. 楽しいギルド生活

それからいろいろなことがあって、ハルヒロは西町と呼ばれる地域の一角に一人きりであらずんでいた。

「ここでいいはずなんだけど……」

西町は貧しい人たちが住んでいる、いわゆるスラム街らしい。実際、建物はどれも古びているか、壊れているか、崩れかけているか、ひどく粗末だ。行き会う人々はたいていみすばらしい。正直、あまり一人では歩きたくない場所だ。なんでここを選んでしまったのか。やめればよかった。でも決めてしまったので、もう遅い。

ハルヒロは石造の建物と木造の建物が複雑に入り組んで合体しているような建物の周りを一回りしようとしたが、不可能だった。狭い路地に入りこんでも、石や木の壁に遮られて、建物の横手や裏手に回ることがどうしてもできないのだ。

ただ、そんなことをしていたら、ある路地の先で極端に背の低い扉に出くわした。錆びついた鉄の扉で、掌に鍵穴がついた紋章のようなものが中央に彫りこまれている。あやしい。これが出入口なのか。

「ず、すみませーん」

呼びかけてみたが無反応だったので、ノックしてみた。手が痛かった。一応、把手を握って、回そうとしたり押ししたり引いたりしてみる。びくともしない。

「違うのかな。何だよ……」

呟いて踵を返そうとしたら、路地に「用件は」という低い声が響いた。どこから？ わからない。路地にはハルヒロしかないし、扉も閉まったままだ。だけど幻聴じゃないと思う。声は間違いなく聞こえた。

「え、ええと……ギルド、に入れてもらいたいなーって」

「入れ」という声と同時に、扉がギシャンと音を立てた。もしかして、解錠されたのだろうか。扉の把手に手をかけると、回った。引っぱってみる。かなり重いが、開く。

開け放った扉の向こうは、狭苦しくて埃くさい通路だった。通路の両側は柵になっていて、縄とか、何かの金具だとか、歯車だとか、わけのわからないものがびっしりと並べられている。おっかなびっくり扉を閉めると、奥のほうが明るい。光源は壁掛けランプで、通路はそこから曲がっていた。しかも、さらに幅が狭まっている。

身体を斜めにしてなんとか通路を進んでゆくと、やっと部屋に出た。薄暗くて、広さもよくわからない。机が置いてあって、その上に女が腰かけ、脚を組んでいた。手でナイフをもてあそんでいる。髪が長い。顔が半分隠れるほどの長さだが、肌はそれほど積極的

隠すつもりがないみたいだ。女は腕も、胸元も、腿も、大胆に露出している。

「我が盗賊ギルドに入りたいとか？」

「……は、はい」ハルヒロはつい生唾なまつばをのみこんでしまった。あまりじつくり見ないほうがいいだろうか。念のため、目をそらした。「その……つもりなんですけど」

「見たところ、あんた見習い義勇兵だね。今日は二人目だな」

「え？ 二人目？」

「ま、それはどうでもいい。あんたがうちに入るなら、七日間の手習いはどうせ一人で受けてもらうしね。マンツーマンさ。あたしがあんたの担当ってことになる。光栄だろ？」

「え、や、まあ……」ハルヒロは上目遣いで女を見た。胸や脚を凝視するのはどうかと思うので、顔を眺める。何歳くらいだろう。たぶんそんなに若くはない。三十歳とか、それくらいだろうか。十六歳のハルヒロにとっては、こう言っただけでいいんだがけっこう年増だ。でも美人だ。やばいくらいのすごい色気だ。「……こ、光栄、です。はい」

「不満なら、他の者に任せたっていいんだけどね」

「い、いえ！ お願いします、是非！」

「ただ、言っとくけど」女はナイフを机に突き刺して、唇をべろりと舐めた。「あたしは厳しいよ？ ついてこれなかったら、お置きだからね？」

「……お手柔らかに、お願いします」

女はふくみ笑いをして、髪をかきあげた。「盗賊ギルドの掟は知ってるかい？」

辺境と呼ばれるこの地には、ギルドというものがある。

ギルドとは、言ってみれば同業者組合だ。鍛冶とか、大工とか、石工とか、調理師とか。果ては戦士、魔法使い、神官に聖騎士、狩人、暗黒騎士、そして盗賊のギルドなんていうものも存在する。

ギルドは同業者の互助会であり、権利を保護するための団体で、互いに技術を研鑽けんけんするための組織でもあるのだという。

この地である仕事に従事するには、そのギルドに入らないといけない。ギルドに入らないで勝手に仕事をしたりすると、必ずギルドが横槍よこやりを入れてくる。みんなそれがわかっているから、ギルドに所属していない者には誰も仕事を依頼したりしない。

掛け持ち不可みたいだし、なんだか窮屈な話だが、ギルドは後進の育成にも力を入れていく。ギルドに入れば、その道のいろはを教えてもらえるのだ。もっと言えば、ギルドに入らないかぎり、その職業に関する技術を習得することはできない。

もちろん、ただで入れてもらえるわけじゃない。

それに、入ったら入ったで、定められた規則、掟を守らないと処罰される。

——というのは、ちなみにぜんぶマナトの受け売りだ。

盗賊ギルドのめずらしい掟についても、マナトが教えてくれた。それもあって、ハルヒ

の下を指先で撫でた。「——あたしはバルバラ。楽しい七日間になりそうだね」

5. 待ちあわせ

実際、楽しい七日間だったのかどうかは、とても人には言えない。

自由を標榜する盗賊ギルドは脱退も自由だ。八シルバー払えば再加入も簡単に認められるが、助言者の資格を持たない者は盗賊作法や奇襲戦法、喧嘩殺法といったギルドの秘技を他人に明かしてはいけない。手習いの内容についても原則、口外禁止だ。

だから言えない。

助言者が授けてくれる盗賊としての通り名も、盗賊界の中だけで通用する名前だ。一般人に教える必要はない。まあ、教えたくもないけど。

「……年寄り猫だし。おれの通り名」

バルバラ先生曰く、年老いた猫みたいに眠そうな目をしているから、らしい。

言われてみれば少し似ているかもしれないが、ちよつとひどいと思う。どうせなら、たとえばパンサーとかジャガーとかウルフとかホークとか、もつとカッコいい通り名があった。正直、オールドキャット以外だったら何でもよかつたような気さえする。

とにかく七日間に及ぶ泊まり込み食事付きの手習いを終えて、ハルヒロはいっぱしの盗

賊になった——というわけでは決してない。

ハルヒロはバルバラ先生に盗賊の仁義や盗賊の哲学、盗賊作法の初歩である鍵開け、喧嘩殺法の基本中の基本である手打、奇襲戦法の大切さなどを叩きこまれた。

でも、まだ身になってはいない。実践することで、それらの技術はだんだんとハルヒロのものになってゆくのだ。また今後、さらに新しい技能を習得するためには、ギルドを訪れて助言者に習わないといけない。そのときは当然、先立つものが必要だし、やっぱり泊まり込みで数日間の教習を受けることになる。

言ってみれば今のハルヒロは、鍵開けや手打といったスキルを覚えはしたものの、熟練度がきわめて低くてうまくは使えない状態なのだ。

手習い修了のお祝いとして、古着の盗賊マント、使い古しのダガーと、同じく使い古しの盗賊道具、それから中古の盗賊靴を贈られて、それらを身につけてはいる。おかげで多少は盗賊っぽく見えるかもしれないが、盗賊らしい働きはたぶんまだできない。

バルバラ先生に厳しく躰けられて、盗賊の道は甘くない、けっこう厳しそうだと思いき知らされた、駆けだしも駆けだしのなりかけ盗賊。それが現時点のハルヒロだ。

「こんなんでいいのかね……」

オールドキャットはため息混じりに待ちあわせの場所へと向かった。

まだ昼前なので、市場はさほど混んでいない。串肉ドリーの前にも客が二人いるだけ

だ。一人は皮革製の美しい鎧を身につけてロングソードを帯びたくりくり髪の毛で、もう一人は弓と矢筒を背に負い、大振りの剣鉞を腰に吊している。こっちはお下げ髪の毛の女だ。

「ランタ、ユメー」

「お？」とランタが振り返って、同じようにハルヒロのほうに顔を向けたユメは串肉をはぐはぐしていた。「ほふええ。」

ユメのほわっとした表情はもろろんのこと、ランタのくりくり髪さえもやけに懐かしく思えた。考えてみれば、手習いは地味にきつかったりもしたし。バルバラ先生はいつもセクシーだったが、ドS寄りのSで容赦がないところもあった。夜、盗賊ギルド内にある通称独房の硬い床の上で薄汚れた毛布にくるまって眠る前によく、きっとみんなつらい思いとかしてるんだろなと想像したものだ。だからおれも頑張ろう、とまでは思わなかったが、ちょっとした慰めにはなった。いやほんと、これでもじつはけっこうやばかったんだって。もう無理とか限界とか脱走しようとか、何回も思ったし。バルバラ先生が怖いから、逃げるのやめたんだけど。

「ランタ……！ ユメ……！」

ハルヒロは走って行って、二人とハイタッチしようとした。ランタは「おお!？」と手を合わせてくれたが、ユメは何がなんだかさっぱりというようなぼわぼわ顔で、ハルヒロの手はあえなく空振りした。おれ、はしやぎすぎ？ 若干気まずい。まあ、いつか。

ハルヒロは軽く咳払いをした。「——よっ。元気？ 他のみんなは？」

「とりあえずそこそ元気だけだな」ランタはあたりを見まわした。「オレら以外は、まだきてないんじゃないかね？」

「ひへはいはあ」ユメはそう答えてから口の中に入っていた串肉をのみくだし、こほんこほんとききこんだ。「……うう」

ハルヒロはユメの顔をのぞきこんだ。「だ、大丈夫？ ユメ」

「うん。なんとかだいじよぶ。そやけど、ちよっぴり苦しかったなあ」

「食べ物が入ってるときにしゃべるのはあんまりよくないし、食べるときはもつと落ちついたほうがいいよ」

「なんでかわからないけれど、ユメ、食べてるときいつつも慌ててしまうねやんかあ」
「そうなんだ……」

「お師匠にも、何回もゆわれた。ユメゆっくり食べないといかんよって。いかんよとはゆってなかったかなあ。お師匠、ゆっくり食べなさいってゆうとったかも」

「おまえさ」ランタがいぶかしそうな横目でユメを見た。「そんなので弓矢とか使えんのかよ。わかんねーけど、狩人とかつてめっちゃ不向きんじゃないかねーの、おまえには」

「弓術はなあ」ユメは首をかしげて、片方のほつぺたをふくらました。「ユメはあかんかもしれないなあってお師匠にゆわれた。いつくら練習しても、へたくそやったしなあ」

「狩人で弓矢使えねーってそれ、お話にならねーだろ。イメージ的になんとなく……」

「でもユメ、狼おおかみけん犬けんが欲しいから、狩人がいい」
 「狼おおかみけん犬けんか」ハルヒロは首筋を搔かいた。経験けんけんを積たんだ狩人は、狼おおかみけん犬けんを飼かい慣ならして意を
 通かじあわせることができるらしい。ただの犬おおかみけんじゃなくて狼おおかみけん犬けんというところがポイントだ。
 ハルヒロもロマンを感じなくもないから、ユメの気持ちは少しわかる。

「盗賊に、使えねー狩人かよ」ランタは、ケツ、と吐き捨てた。「先が思いやられるぜ、まったく」

「……天パには言われたくないんだけど」

「天パ言うな！」

「……あの」

「ヒイツ……!？」ランタが跳びあがりながら振り向いた。

見れば、ランタの後ろに、黒っぽい三角帽子を被かつて同じ色の衣を着た小柄な女の子が立っている。帽子の鍔つばが大きいし、手に持っている杖えによりかかるとしてうつつむいているので、顔は見えない。でも、ハルヒロはそれが誰だかすぐわかった。「シホル？」

女の子は無言でこっくりうなずいた。やつぱりシホルだ。

「つーか……」ランタは目を睜ひらけて胸を押さえている。「び、びびらせんじゃねーよ。いきなり背後からとか。おまえ、魔法使いになつたんだろ。むしろ、盗賊っぽいぞ」

「……ご、ごめんなさい。き、気づいてもらえなかったから……どうやって声をかけたらいいか、わからなくて、それで……」

「声なんて普通にかけりゃいいだろーが。おいとか、おつすとか、ハイイとか」

「……ごめんなさい。普通にできなくて、ごめんなさい……」

「いちいち謝あやんなよ！ オレが悪者みたいじゃねーかつー」

「微妙びまうに悪者だろ」ハルヒロはランタとシホルの間にすつと割りこんだ。「どっちかっていうと。そんな怒るようなことでもないし」

「善人ぶってんじゃねーぞ、ハルヒロ。おまえ、シホルが隠れ巨乳だからってな」

「え？ 隠れ……?」ハルヒロは思わずシホルの胸のあたりに視線をそそいでしまった。

「……」シホルが素早く腕で胸を押さえたので、真偽の程はわからないが——何やってんだよ、おれ。見ちゃだめだろ。顔が熱い。ハルヒロは頭を下げた。「……ごめん」

「いえ……」

「隠したってなあー」ランタはズバツとシホルを指さした。「オレの目はごまかせねーぞ。寄せてあげたニセチチとかだつて、たいてい見破れるからな！」

ハルヒロはランタを白い眼めで見た。「……何なんだよ、そのスキル」

「スキルじゃねえ！ これは天がオレに与えた才能だ！」

「ああ……」ユメが自分の胸を、つん、つん、とつついた。「シホル、おっぱいおつき

いんかあ。いいなあ。ユメ、ちっぱいやねんかあ。それで痩せてるんやったらいいんだけど、けっこうぶにってて、ちっぱいやねん。それってなんか悲しいやんかあ」

「……あたしは、あの……」シホルは自分自身を消し去ろうとしているかのような勢いで身を縮めた。「……ただ、ふ、ふとってるだけ、だから」

「そうなんかなあ。シホルは太ってるふうには見えんけどなあ」

「そ、それは……き、着やせ、するだけで……」

「ははーん」ランタが鼻で笑った。「シホル。おまえ、女子に嫌われるタイプだろ」

「えっ……」

「べつに太ってねーのに自分は太ってるとかいうやつって、女同士の中でいっちな嫌われるからな！」

「……あ、あたしは、そんな……」シホルは肩を震わせはじめた。「……ほ、ほんとに、ふとってる、し」

「うお……？」ランタは鼻白んだ。「いや、ちょっと、なっ、泣くことなくね？」

「……な、泣いてない、です」

「泣いてんだろーがっ！ 明らかに涙ぐんでるだろ！ ほらあっ！」

「シホル、シホル」ユメがシホルを抱きよせた。「だいじよぶやからなあ。ユメはシホルのこと、嫌いとか思っていないから。ユメ、まだシホルのこと、よく知らんけどなあ」

ハルヒロは苦笑いした。「それって微妙にフォローになってないよ、ユメ」

「ほ？ そうなんかあ？ でも、気持ちいいなあ、シホルのからだ。ほっそいように見えるけど、さわつたらぶにぶにゆしてんねやんかあ」

「……あ、あまりさわらないで。は、恥ずかしいから……」

「お、おまえら……」ランタの鼻息が荒い。荒すぎる。「眼福だぞコノヤロウ！ 公衆の面前でなあ！ いいのかおい！ もっとやれ！」

「ずいぶん盛りあがってるね」と、別の声が割りこんできた。

ハルヒロは声の方向に目をやった。「マナト！」

マナトは青いラインが入ったフード付きの服を着ていた。手にはまっすぐな棒を持っている。ショートスタツフだ。

「俺が最後かな」マナトは笑みを浮かべて全員を見まわした。「俺が神官で、ハルヒロが盗賊、ユメさんが狩人で、シホルさんが魔法使い。それから、ランタくんが戦士。五人そろったね」

「おまえさ」ランタが顔をしかめた。「その、くんとかさんとか付けんのやめろよ。なんかまだるっこしいだろ。つーか、ハルヒロにはつけてねーじゃん」

「じゃあ、ランタ」

「呼び捨てにされたらされたでむかつくな！ オレのことはランタ様と呼べー！」

「はは。いやだよ、そんなの」

「朗らかに笑いながらサラッと拒否るんじゃないかねえ！」

「ユメのことも、ユメでいいよお」

「……あ。あたしも、できたら、シホルで」

「そう？ だったら、そうさせてもらおうかな。ユメ。シホル」

ユメが「はぁーい」と手をあげてみせた。シホルも小声で何か返事をしたが、よく聞こえなかった。かなり照れているみたいだ。

「マナト」ハルヒロが右手を振りかぶると、マナトはシヨートスタッフを左手で持ちなおして右手をあげた。掌と掌がぶつかる。いい音がした。ハルヒロはマナトの肩の近くを腕で軽く小突いた。「お疲れ、マナト。神官のは——何だっけ、規定修練？ だっけ？」

「うん。盗賊ギルドの手習いはどうだった？」

「え？ や、余裕、余裕」とつきに強がってしまったが、顔が引きつってしまい、すぐに嘘なんかつくのはやめようと思いなおした。「……嘘。わりときつかったかも。先生がやばくてさ。美人なんだけど、めちゃくちゃおっかなくて」

「美人だったんだ？ いいな。俺なんか修師マスターがごつい男の人で、厳しいし、声もでかいし、耳が痛くなってひどかった」

「耳痛いって、マナト、どんだけ怒鳴られたんだよ」





最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！